

〈研究ノート〉

京城帝国大学法文学部の出版活動と岩波書店

平田賢一（大阪経済法科大学
アジア太平洋研究センター）

はじめに

一昨年（2015）3月、長年勤めた岩波書店を退職した。さまざまな仕事に関わる中で、戦前の岩波書店の出版物の中に、京城帝国大学法文学部の論集や叢書などの出版物があることを知った。戦後の岩波書店の朝鮮関係の出版物から考えると意外の感があった。

『岩波書店八十年』（1996）で調べてみると、法文学部の論集・叢書を14冊刊行しており、かなり関係が深いことが分かった。法文学部以外にも満蒙文化研究会（のち大陸文化研究会）や衛生調査部の本も刊行している。

本稿では、京城帝国大学法文学部の出版活動を基本史料や先行研究に依拠して概括し、上記の論集・叢書がどのような経緯で岩波書店から刊行されることになったのか、戦前の岩波書店での朝鮮関係の出版物を概観しながら検討する。最後に京城帝国大学と岩波書店の关系到大きな役割を果たした安倍能成と戦後の岩波書店とのかわりにも言及したい。

1 京城帝国大学法文学部の出版活動

京城帝国大学は、東京帝国大学（1877年）、京都帝国大学（1897年）、東北帝国大学（1907年）、九州帝国大学（1911年）、北海道帝国大学（1918年）に続く、6番目の帝国大学として、京城（当時の名称、現在のソウル）に1924年5月に設立された（この後、台北帝国大学＜1928年＞、大阪帝国大学＜1931年＞、名古屋帝国大学＜1939年＞と続く）。当初は予科だけだったが、1926年5月、法文学部と医学部が設置され、

1941年に理工学部が追加設立された。

京城帝国大学の出版事業としては、「李朝実録」1882巻888冊の影印刊行（1929～33年）があるが、法文学部・医学部でも独自に出版活動をおこなっており（理工学部にはなかったようだ）、この点については、田川孝三「京城帝国大学法文学部と朝鮮文化」（京城帝国大学創立五十周年記念誌編集委員会『紺碧遙かに——京城帝国大学創立五十周年記念誌』京城帝国大学同窓会、1974）や通堂あゆみ「植民地大学文献目録 朝鮮編」（酒井哲哉・松田利彦編『帝国日本と植民地大学』ゆまに書房、2014）という詳細な研究がある。特に、法文学部史学科に学び卒業後法文学部助手であった田川の論考は貴重で、朝鮮関係・歴史関係の論文内容や著者の研究歴を詳しく論じている。

本稿では、法文学部の出版活動のみを扱うので、医学部や付属研究機関である満蒙文化研究会（のち大陸文化研究会）などの出版活動については、上記の通堂あゆみ・田川孝三の論考を参照されたい。

当時の法文学部の出版活動については、「京城学派」といわれた法学系の人びとの論考についてのみの評価であるが、「本土でも注目的」だったという（石川健治「コスモス——京城学派公法学の光芒」『『帝国』日本の学知』1、岩波書店、2006）。ここでは、『京城帝国大学一覧』の「出版物」の項（昭和16年版、昭和17年版。16年版については渡部学編『日本植民地教育政策史料集成 朝鮮篇 45巻』竜溪書舎、1989収録の復刻版。17年版については国立国会図書館蔵のデジタルデータに拠る）や上記の田川孝三、通堂あゆみの論考を基に、シリーズ別にまとめてみると以下ようになる。

- ①「殆どが学外の所蔵本」(田川、前掲論文)であるが、9種38冊の貴重な古書の復刻(1928～34年3月)。タイトルは以下のとおり。
『龍龕手鏡』『青丘永言』『海東歌謡』『懶翁和尚語録』『懶翁和尚歌頌』『一切経音義』『大東金石書』『大東金石目』『蔡邕独断』『白雲和尚語録』
- ②附属図書館所蔵の旧奎章閣本から歴史、言語、文学に関する貴重資料10種9冊の影印刊行(1935年3月～44年3月)。タイトルは以下のとおり。
『瀋陽状啓』『大東輿地図』『挹翠軒遺稿』『訥齋先生集』『批選龜峯先生詩集』『竜飛御天歌』『増正交隣志』『攷事撮要』『朴通事諺解』『老乞大諺解』
- ③「京城帝国大学法文学部紀要」1冊(1929年3月)
小倉進平「郷歌及び吏読の研究」
- ④「京城帝国大学法文学部研究調査冊子」3冊(1929年3月～30年4月)
第一輯 小倉進平「平安南北道の方言」第二輯 小倉進平「咸鏡南道及び黄海道の方言」第三輯 田保橋潔「近代日支鮮関係の研究——天津条約より日支開戦に至る」
- ⑤「京城法学会論集」1冊(1928年11月)
- ⑥「京城帝国大学法文学会第一部論集」5冊(1929年9月～33年12月)
⑤の「京城法学会論集」の後継誌、号数を継承。第二冊「朝鮮経済の研究」第三冊「私法を中心として」第四冊「法政論纂」第五冊「法学論纂」第六冊「朝鮮社会経済史研究」
- ⑦「京城帝国大学法学会論集」9冊(19点、1934年9月～44年11月)
⑥の「京城帝国大学法文学会第一部論集」の後継誌。号数を継承。第七冊「国家の研究」第八冊「判例と理論」第九冊「朝鮮社会法制史研究」第十冊「朝鮮経済の研究」第三 第十一冊「法と政治の諸問題」また、第十二冊～第十五冊はそれぞれ第一～第四号を刊行しているが、タイトルなし。⑥から名称は変わったが、文学系の内容を含む。
- ⑧「京城帝国大学法文学会第二部論纂」5冊(1929年9月～33年12月)

- 第一輯「朝鮮支那文化の研究」第二輯「哲学論集」第三輯「日本文化叢考」第四輯「言語 文学論叢」第五輯「西洋芸文雑考」
- ⑨「京城帝国大学文学会論纂」12冊(1935年3月～1945年8月)
- ⑩「京城帝国大学法文学部第二部論纂」の後継誌。第十輯までは論文集。第十一輯は単著。また、第十二輯は印刷されていたが、終戦の混乱で未刊行。第一輯「東方文化史叢考」第二輯「日本文学研究」第三輯「哲学論叢」第四輯(特輯号)「京城帝国大学創立十周年記念論文集 哲学篇」第五輯(特輯号)「京城帝国大学創立十周年記念論文集 史学篇」第六輯(特輯号)「京城帝国大学創立十周年記念論文集 文学篇」第七輯「史学論叢」第八輯「語文論叢」第九輯「教育と哲学」第十輯「史学論叢第二」第十一輯「朝鮮方言学試攷—「鋏」語考」(河野六郎著)第十二輯「李退溪と山崎闇斎」(阿部吉雄著、未刊)
- ⑪「京城帝国大学法学会叢刊」7冊(1935年3月～42年3月)
第一冊「朝鮮開国交渉始末——朝鮮外国関係史説」、第二冊「羅馬元首政の起源と本質」第三冊「国家構造論」第四冊「履行補助者の研究——履行補助者の過失に因る債務者の責任」第五冊「断種法」第六冊「手形交換法論」第七冊「実定法秩序論」
- ⑫「京城帝国大学法学会翻訳叢書」1冊(1936年11月)
「ケルゼン・一般国家学」

以上が法文学部の出版活動の概要であるが、ここに朝鮮人研究者が登場することはなかった。その点について植民地大学研究のパイオニアであった馬越徹は、医学部の雑誌に掲載された論文のうち朝鮮人研究者の論文が20%を超えるのとは対照的に、「法文学部の論集には朝鮮人研究者の論文は一篇も掲載されていない」(馬越徹『韓国近代大学の成立と展開』名古屋大学出版会、1995)と述べている。どういう事情だったのだろうか？ また、法文学部では出版活動と同時に講演会活動も盛んにおこなわれているが、これらについては今後の課題としたい。

2 京城帝国大学法文学部と出版社

上記の論集・叢書のうち出版社が関わって刊行したものは、以下のとおりである。

- ・刀江書院 14冊 (⑤第一冊<1928年>の1冊、⑥のうち第二冊～第六冊<1929～33年>までの5冊、⑦のうち第七冊・第八冊<1934～35>の2冊⑧第一輯～第五輯<1929～33年>の5冊、⑩の第一冊<1935年>の1冊)
- ・近澤商店出版部 1冊 (③1929年)
- ・大阪屋号書店 6冊 (⑨のうち第一輯～第六輯<1935～36年>までの6冊)
- ・岩波書店 14冊 (⑦のうち第九冊～第十一冊<1937～40年>までの3冊、⑨のうち第七輯～第十輯<1938～41年>までの4冊、⑩のうち第二冊～第七冊<1939～42年>までの6冊、⑪1936年の1冊)
- ・東都書籍株式会社京城支店 1冊 (⑨のうち第十一輯<1945年>の1冊)

このうち岩波書店で刊行したものを、論文名・書名・著者名を明記して掲げておく。

⑦京城帝国大学法学会論集

第九冊 朝鮮社会法制史研究 京城帝国大学法学会編 (代表者船田享二)

1937年5月15日 定価3円80銭

花村美樹：高麗律

内藤吉之助：経国大典の難産

四方博：李朝人口に関する一研究

奥平武彦：朝鮮の条約港と居留地

第十冊 朝鮮経済の研究第三 京城帝国大学法学会編 (代表者船田享二)

1938年10月30日 定価5円

大内武次：朝鮮に於ける米穀生産

静田均：朝鮮に於ける金融組合の発達

小田忠夫：併合初期に於ける朝鮮総督府財政の発達

鈴木武雄：「北鮮ルート」論

四方博：李朝人口に関する身分階級別的観察

第十一冊 法と政治の諸問題 京城帝国大学法学会編 (代表者船田享二)

1940年2月17日 定価3円50銭

清宮四郎：帝国憲法と皇室典範との関係

鶴飼信成：公法上の抛棄に就て

尾高朝雄：法の目的の対立と調和 (法の実定性の根拠について)

船田享二：十二表法とソロンの法典

松本馨：ジョージ四世と内閣 (英国十九世紀初頭に於ける君権)

⑨京城帝国大学文学会論叢

第七輯 史学論叢 烏山喜一編 (編纂責任者 烏山喜一・松月秀雄・中島文雄)

1938年3月10日 定価3円80銭

藤田亮策：朝鮮発見の明刀銭と其遺蹟

末松保和：新羅上古世系考

藤塚鄰：清朝文化東漸史上に於ける李月汀と金阮堂

大谷勝眞：三階某禪師行状始末に就いて

烏山喜一：渤海東京考

玉井是博：宋代水利田の一特異相

金子光介：ベルギー国中立制定の史的考察 (1830-39)

第八輯 語文論叢 中島文雄編 (編纂責任者 中島文雄・烏山喜一・秋葉隆)

1939年2月24日 定価2円80銭

麻生磯次：曲亭馬琴の著述生活と思想の傾向

高橋亨：朝鮮のユーモア

佐藤清：キーツの特徴

時枝誠記：敬語法及び敬辞法の研究

中島文雄：間投詞の意味論的考察

第九輯 教育と哲学 秋葉隆編

1940年3月19日 定価3円80銭

松月秀雄：明治以降の学校令に於ける皇国教育目的観顕現の史的考察

田花為雄：活動課程叢考

天野利武：継時的比較に於ける副印象・過渡経験の意義

田辺重三：個体の認識

秋葉隆：原始社会の流動性

第十輯 史学論叢第二 末松保和編 (編纂責任者 末松保和・秋葉隆・麻生磯次)

1941年11月28日 定価3円50銭

松本重彦：姓氏解説

末松保和：麗末鮮初に於ける対明関係

⑩京城帝国大学法学会叢刊

第2冊 船田享二：羅馬元首政の起源と本質

1936年11月5日 定価2円80銭

第3冊 尾高朝雄：国家構造論 1936年12月25日 定価3円20銭

第4冊 松坂佐一：履行補助者の研究 1939年4月18日 定価2円30銭

第5冊 藤本直：断種法 1941年3月25日 定価3円50銭

第6冊 西原寛一：手形交換法論 1942年3月30日 定価3円50銭

第7冊 尾高朝雄：実定法秩序論 1942年3月30日 定価4円80銭

⑫京城帝国大学法学会翻訳叢書

ケルゼン（清宮四郎訳）：一般国家学 1936年11月5日 定価5円50銭

岩波書店はこれらの論集や叢書を出版するに際し、どのように宣伝したのだろうか？ 一例にすぎないが、法学会論集第十一冊「法と政治の諸問題」についての『図書』の広告文を掲げておく。

京城帝国大学法学会が『朝鮮経済の研究第三』の後を受けて世に問ふ新業績である。同会の論集も巻を追ふこと茲に十一、益々充実新領域を開拓してゐるが、本論集は特に法と政治に関する興味深く且つ重要な研究五篇を収めてゐる。独自の研究として学界に寄与する好論文である（『図書』1940年2月号）

上記したように出版社が関わった論集・叢書の刊行年をみると、版元が、刀江書院（1928～35）→大阪屋号書店（1935～36）→岩波書店（1937～42）と変わっていくことが分かる。その経緯については現時点では不明だが、当初刀江書院が版元になったのは、刀江書院社長の尾高豊作が京城帝国大学法文学部教授・尾高朝雄の兄だったことによるものであった。尾高朝雄の次女・久留都茂子は、「父は、「京城大学法学会論集」のシリーズを同書院から出すなどして、兄の出版事業にも積極的に協力しました」（『父・尾高朝雄を語る——久留都茂子インタビュー記録』2012）と回想している。

また、刀江書院から大阪屋号書店への版元の変更については、刀江書院に何らかの社内事情があったのではないかと考えられる。それは、

刀江書院が版元になって刊行した最後の2冊になった京城帝国大学法学会叢刊第一冊『朝鮮開国交渉始末』（1935年3月）や京城帝国大学法学会論集第八冊「判例と理論」（1935年11月）の奥付に表示されている発行者が、尾高豊作から関根喜太郎に代っているからである。刀江書院の社内体制変更が版元変更につながったのかもしれない。

刀江書院に代わって版元を引き受けた大阪屋号書店は1908年、「満洲」の営口で濱井松之助（1874～1944）が創業、その後、大連を経て東京（1911）に移転、1947年にいったん解散、同年再興している出版社である（『日本出版百年史年表』日本書籍出版協会、1968、『出版書籍商人物事典』第一・二巻、金沢文圃閣、2010）。大阪屋号書店は満洲・朝鮮（1914年京城支店開設）で取次兼出版社として活発に活動していたところだから、京城帝国大学との関係は既にあったと推察されるので、版元になったことは順当なことだったように思える。

大阪屋号書店から岩波書店への変更についても、その経緯は不明である。ただ、岩波書店と京城帝国大学関係者との接触を推測できる回想（後述）がわずかだがあるので、その点について述べたいが、その前に戦前の岩波書店で刊行した朝鮮をテーマにした本について概観しておく。

3 戦前の岩波書店と朝鮮

『岩波書店八十年史』（前掲）から、戦前、朝鮮をテーマに刊行した本を抜き出して発行・発売年代順に列挙する。（1で紹介したものも含む。※は発売書目）。

1932年9月25日 安倍能成：青丘雑記

1933年1月15日 金素雲訳編：朝鮮童謡選（岩波文庫）

1933年8月5日 金素雲訳編：朝鮮民謡選（岩波文庫）

1935年7月28日 日本学術振興会：朝鮮米穀経済論※

1936年6月30日 日本学術振興会：朝鮮米生産費に関する調査※

1937年5月15日 京城帝国大学法学会編：朝鮮社会法制史研究（京城帝国大学法学会論集9）

- 1938年10月15日 安倍能成：朝暮抄
 1938年10月30日 京城帝国大学法学会編：朝鮮
 経済の研究 第三（京城帝国大学法学会論集
 10）
 1939年8月30日 朝鮮総督府水産試験場：朝鮮魚
 類誌 第一冊※
 1940年2月5日 朝鮮農村社会衛生調査会編：朝
 鮮の農村衛生
 1940年11月22日 黒田亮：朝鮮旧書考
 1941年8月30日 関野貞：朝鮮の建築と芸術（関
 野博士論文集3）
 1941年11月28日 京城帝国大学文学会編：史学
 論叢 第二（京城帝国大学文学会論纂10）
 1942年8月24日 京城帝国大学衛生調査部編：土
 幕民の生活・衛生
 1944年6月15日 小倉進平：朝鮮語方言の研究
 上巻
 1944年9月10日 小倉進平：朝鮮語方言の研究
 下巻

なお、安倍能成の随筆集2冊はすべてが朝鮮をテーマにするものではないが、主に朝鮮のことを扱っているのが、ここに掲げた。安倍には他に『草野集』などの随筆集があり、それらにも朝鮮をテーマにした随筆があるが、本全体から見れば一部なのでここでは省略した。

この一覧の中で、今日一般に知られているのは金素雲訳編の岩波文庫2冊ぐらいと思われるが、京城帝国大学法文学部やその関係者（安倍・黒田・小倉）による書物が大半を占めていることが分かる。このような関係はどのようにしてつくられたのだろうか。

4 京城帝国大学法文学部と岩波書店

京城帝国大学法文学部初代学部長となった安倍能成は、岩波茂雄と一高時代以来の親友であった。以下に述べるように、京城帝国大学法文学部と岩波書店の関係はこの二人のつながりから始まったのである。

安倍は戦後、『岩波茂雄伝』（1957、新装版2012）で、岩波書店との関わりを以下のように述べている。

岩波開店当時は岩波の相談相手として、殊に

出版を始めた当座は、岩波の出版書籍の広告とは殆ど皆私が書いてやった。岩波の第一の出版なる「哲学叢書」刊行の辞、それから「漱石全集」「寺田寅彦全集」の刊行の辞なども、私の書いたものであった。しかし私は著者として、岩波書店を重からしめる名著や力作を寄与したことはない。岩波を感激させる学問的態度もなかった。

また安倍が岩波に漱石を紹介し、岩波書店創業（1913）の翌年、漱石の『こゝろ』を出版できたことは、安倍が中心になった「哲学叢書」とともに岩波書店の礎を築くのに大いに貢献した。安倍は「名著や力作を寄与したことはない」と率直に述べているが、安倍の本は戦前だけでも、『西洋古代中世哲学史』（1916、哲学叢書5）をはじめ13冊、共著・編著・翻訳などを加えると27冊にもなる。

岩波書店の創業当時は、安倍をはじめ上野直昭、阿部次郎（主幹として雑誌『思潮』を創刊）、宮本和吉（『哲学雑誌』編集、安倍の妹婿）、伊藤吉之助（『哲学雑誌』編集）、荻原藤吉（井泉水）、石原謙などの親友・同級生が岩波書店の出版に関わり、その出発を支えた。上野・宮本はその後、京城帝国大学教授になり、後述する任文桓の回想からも、安倍とともに岩波と京城帝国大学法文学部の出版に関わったと推察される。

京城帝国大学法文学部の教授であった有泉亨（民法）、鈴木武雄（経済）が当時を回想した座談会で次のように述べているのは、京城帝国大学法文学部での安倍たちの雰囲気的一端を示すものであろう。

有泉 文科関係は非常に仲の好い先生が集まったというような節がありますが……。

鈴木 たしかに岩波哲学派とか言うようにね……。〔「法文学部教授を囲む座談会——あのとき・そのことを語る——」昭和48年3月24日、他に清宮四郎（憲法）、桜井義之（歴史）が出席、前掲『紺碧 京城帝国大学創立五十周年記念誌〕〕

また、安倍に近い人が岩波書店に入店、重要な役割を果たすようになる。

安倍の従弟・堤常は、「岩波の望み」で1915年2月入店、戦前～戦後の長きにわたって岩波書店の大番頭といわれた（安倍能成『我が生ひ立ち』岩波書店、1966）。安倍は甥の小山久二郎、教え子の布川角左衛門を岩波茂雄に紹介、彼らはその縁で入店している。小山は1932年で退社して小山書店を興すが、その後も岩波茂雄との関係はつづいた（小山久二郎『ひとつの時代—小山書店私史』六興出版、1982）。安倍は関東大震災で被害を受け学資がままならなくなった法政大学の教え子・布川を岩波茂雄に紹介。校正のアルバイトとして岩波書店で仕事をするようになった布川は卒業後、岩波書店に入店。『岩波哲学小辞典』（1930）、岩波全書（1933創刊）などを手がけるようになる。また安倍が1926年、京城帝国大学に赴任すると、布川はその留守宅に住みこむほどの関係であった（日本出版学会「布川角左衛門事典」編集委員会編『布川角左衛門事典』日本エディタースクール出版部、1998等）。

既に述べたように京城帝国大学の出版活動と岩波書店の関係は、1937年5月に刊行された京城帝国大学法学会論集第九冊「朝鮮社会法制史研究」に始まるが、その直接の接触を推測させる興味ぶかい回想を紹介しておきたい。

岩波茂雄はその前年の1936年10月11日から、野上豊一郎、三女美登利と朝鮮旅行をおこない、金剛山まで脚をのばしている。岩波はその時、京城で安倍能成・上野直昭・宮本和吉・速水滉・田辺重三等に会っている（前掲『岩波書店八十年』）が、この時、かつて岩波書店でアルバイトをしていて、当時朝鮮総督府の役人になっていた任文桓が次のように述べている。

朝鮮ホテルに旅装を解いた先生は、京城帝大の安倍能成先生を中心に、日本人学者達としきりに会合を重ねていた。何かの出版のために、具体的協定に多忙のように見えた。（『愛と民族』同成社、1975、のち『日本帝国と大韓民国に仕えた官僚の回想』草思社、2011と改題して刊行）

この会合で話された出版のための「具体的協定」とは、その時期から考えて、「朝鮮社会法制

史研究」に始まる「京城帝国大学法学会論集」についてであった可能性が高いと思われる。ここでも安倍が深く関わっていたようだ。

安倍はこの2年後、1940年9月に第一高等学校校長に転じ、朝鮮を去る。

5 岩波茂雄と朝鮮人

これまで述べたように岩波茂雄は朝鮮と関係ある出版物をかなり刊行しているが、彼の朝鮮人とのかわりはどうだったのだろうか。

まず、1923年9月1日におこった関東大震災の時、岩波が朝鮮人の暴動説をデマと否定したことを取りあげておきたい。安倍は以下のように回想している。

この震災に遇つての岩波の勇氣百倍と共に、岩波のえらさを示すものは、震災最中の朝鮮人の蜂起侵入を断乎として否定したことである。これは亀井高孝が当時会った知人中唯一であったといっている。その後朴烈事件というのがあって、朝鮮人朴烈と彼の妻の金子文子の二人が震災直後の九月二日に拘引されたが、岩波は彼等のその後の行方不明についても深く憂慮していた（前掲『岩波茂雄伝』）。

小林勇『惜櫟莊主人—一つの岩波茂雄伝』（岩波書店、1963）や中島岳志『岩波茂雄 リベラル・ナショナリストの肖像』（岩波書店、2013）にも、岩波が中国人・朝鮮人に対して援助を惜しまなかったことが紹介されている。

また、『岩波書店八十年』（前掲）によれば、岩波書店では朝鮮人（あるいは中国人も含まれるか）を雇用しており、以下のような名前が列挙されている。

昭和13年末現在者およびその後の入店者で18年末までに退店した人

黄金穂 崔熙甲 朴必淳 金喆洪 郭仏

昭和18年末現在者

高基鉉 朴必成 朴文国 黄寿永

昭和18年末現在者およびその後の入店者で23年末までに退店した人

高基鉉 朴必成 朴文国 黄寿永

以上から、黄金穂、崔熙甲、朴必淳、金喆洪、郭仏、朴必成、朴文国、黄寿永が店員として勤務していたことが分かる。残念ながら現時点ではこの人たちの経歴についてはほとんど不詳である。ただ、このうち、黄寿永（1918～2011）は韓国で「開城美術史学者三人衆」の一人に数えられる有名な美術史研究者になり、日韓会談文化財小委員会で委員・代表（1958～65）として活動している（外村大氏の教示）。また、高基鉉については、岩波茂雄が「研究の庇護」をしていたという安倍の回想（前掲『岩波茂雄伝』）がある。

また昭和18年末現在者およびその後の入店者で23年までに退店した人の中に「金沢友栄」という人物がおり、朝鮮人で、強制された創氏改名により日本名を名乗っていた可能性がある。なお、社史には掲載されていないが、学生アルバイトとして岩波書店で働いていた人もいた。前述の任文桓は東大法学部の学生時代、学生部で紹介状をもらって岩波茂雄に会い、約5か月間小売部で仕事をしたという（前掲『愛と民族』）。任と岩波茂雄との関係はその後も続き、岩波が1935年ヨーロッパ旅行をした時のおみやげを任に贈り、任はその礼状を書いている（1936年2月20日付、岩波書店編集部編『岩波茂雄への手紙』岩波書店、2003）。また安倍は岩波で働いていた人物として新井という名前を書き遺している（前掲『岩波茂雄伝』）

6 戦後の岩波書店と安倍能成

1945年8月15日、第二次世界大戦は終わった。日本は連合軍に降伏し、朝鮮は日本の植民地から解放された。

解放直後の8月17日、「京城帝国大学」の表札から「帝国」の二字が抹消された。10月には、「京城大学」と改称し、翌1946年9月18日、同じ施設を利用して国立ソウル大学の開校式がおこなわれた（工科大学を除く）。

第一高等学校校長として8月15日を迎えた安倍能成は、山本有三、谷川徹三、志賀直哉、和辻哲郎らと相談、「雑誌を出して、降服後の日本の為に尽くさう」と、岩波茂雄に雑誌の発行を引き受けるように要請した。岩波茂雄が承諾して誕生したのが、『世界』である。命名者は谷川徹

三であった。1945年12月中旬に発売された創刊号には安倍が巻頭論文「剛毅と真実と智慧とを」を書いたが、編集長・吉野源三郎との意見の相違、安倍の文部大臣就任（46年1月）、岩波茂雄の死（46年4月25日）などがあって、安倍たちは、新たに『心』を創刊（48年7月、命名者は武者小路実篤）、『世界』からは離れた（安倍能成『戦後の自叙伝』新潮社、1959）

こうして、安倍など京城帝国大学関係者と岩波書店との関係が変わっていくが、『世界』に掲載された朝鮮関係の論文・回想がその推移を象徴しているように思われるので、ここでは、京城帝国大学の教授であった鈴木武雄・藤田亮策、劇作家村山知義のものを紹介しておきたい。

まず、鈴木武雄（経済学）「朝鮮統治への反省」は有名な丸山真男の「超国家主義の論理と心理」と同じ46年5月号に掲載されたものである。タイトルにあるように「深刻なる自己反省」をすと言いつつ、一視同仁、内鮮一体の政策は「理想主義的な性格」をもつ「同胞愛的な新しい外領統治の理念」であって、朝鮮は35年に及ぶ日本の植民地期に「驚異すべき躍進を遂げた」と述べている。また、藤田亮策（考古学）は「楽浪の思い出」（1947年7月号）で、自らの行ってきた発掘調査について「楽浪の文化を見出してこれを紹介し、漢代文物の研究がこれが為めに急速に発達し、東洋文化の研究に大きな貢献を成し遂げたことは、日本の学者の大陸に遺した記念すべき業績」、「新らしい朝鮮国によって感謝されてよい事柄」とまで言っている。

一方、藤田の回想が掲載されて3年後、1950年8月号の『世界』において、村山知義は、1945年8月15日に滞在していたソウル（京城）の様子を以下のように回想している。

正午。天皇の声だというのだが、雑音が多くてほとんど聞き取れない。ただ、日本が無条件降伏したらしい、ということだけはわかった。「朝鮮はすぐ独立できるだろうか？」というのが、すぐ皆の口をついて出た疑問であった。「それは独立ができるにちがいない、長い植民地の歴史は終わったのだ！」と私はいった。やがて私の胸の中に、抑えても抑えても抑えきれないよろこびが湧き上って来た。軍人とファシズムの支配は終わった（「朝鮮での

八・一五」)。

安倍は『世界』からは離れたが、岩波書店との関係はその後も続いた。1949年4月25日、岩波書店が株式会社になった時、監査役に就任している。また、吉野源三郎に請われて平和問題談話会の代表となり、全面講和、中立主義を主張した。

また、時間的には少し遡る戦後一年経ったころのことと言うが、安倍と岩波書店の関係をよく現している回想を書き留めておきたい。当時日本評論社の編集者で、労働組合の委員として岩波書店労働組合と交流のあった村上一郎（のち文芸評論家）は岩波書店を訪れた時、以下のような光景を目にしたという。

岩波茂雄は敗戦後まだぼくが出版界へもどらぬうちに死んだから、直接話す折はなかったが、岩波書店のあの旧一橋大学のホールを改造したのだとか聞く建物の二階に、西島麦南の書いた「主人室」という標札がかかげられ、あたかも故「主人」がそこに在るかのごとく、人びとがその周辺を緊張した面持ちで往き来し、ただひとりステッキを手に白麻の服なぞ一着に及んだ安倍能成ばかりが、案内も乞わずそこに出入りしているさまを、傍観したのである（村上一郎『岩波茂雄』砂子屋書房、1982）。

安倍は『岩波茂雄伝』『我が生ひ立ち』（前掲）など編著を含め戦後も7冊岩波書店で本を出している。この安倍を筆頭に京城帝国大学法文学部に在職していた人びとは、『世界』などには登場しなくなったものの、戦後の岩波書店の出版物の著者としては数多く登場している。特に国文学と法哲学の分野が多い。一例を挙げると、1957年に刊行を開始した日本古典文学大系（全100巻＋別巻2）の監修者は高木市之助、西尾実、久松潜一、麻生磯次、時枝誠記の5名だったが、高木、麻生、時枝の3名は京城帝国大学に在職していた人びとである。

一方、戦後、朝鮮をテーマにした本はなかなか刊行されず、旗田巍『朝鮮史』（岩波全書、1951年）がその最初の本になった。

おわりに

以上、京城帝国大学法文学部の出版活動と岩波書店の関わりについて述べてきたが、調査不足のためこの問題について岩波書店関係者の回想・証言を見出すことができなかった。植民地朝鮮のことをどう考えていたのか知りたいところである。そういう意味からも、今年（2017）刊行されるという『岩波茂雄文集』（全3巻）にどのような資料が載せられるのか期待したい。

戦前、岩波書店は『日本資本主義発達史講座』の発禁（1932～33年）、津田左右吉裁判（1940～44年）などで言論弾圧を受けていたが、その一方で、内閣情報部は岩波茂雄を出版新体制準備委員に選出（1940年9月7日）、日本出版文化協会創立委員にも任命（1940年10月）している。戦時下においても日本の出版界の中心的な存在とみなされ、活動をしていたのである（佐藤卓己『『図書』のメディア史』岩波書店、2015）。これらの事実は戦前の岩波書店の出版活動を考える時にはふまえておきたいことである。

その一方で、1937年10月の岩波新書創刊にも注目しておきたい。現在も続くこのシリーズは岩波書店が初めて同時代のことをテーマにした出版物であり、当時戦争の相手国（敵国）であった中国の実像に迫る本の出版を目的の一つにしていたのである。その責任者であった吉野源三郎は、当時のことを以下のように回想している。

岩波新書は、この時期の日本を支配しようとしていた神がかりな国粋主義や中国蔑視その他の帝国主義的な思想に抵抗して、国民の間に科学的な考え方や世界的なものの見方を広め、中国に対する日本の軍事行動を反省し批判する資料を提供しようという考えから出版したものでした（吉野源三郎『職業としての編集者』岩波書店、1989）。

新書の創刊が戦後の『世界』創刊につながり、岩波新書や『世界』が戦後の岩波書店の出版物の中軸になったことを考えると、戦時下に岩波新書を創刊したことは、「日中戦争へのリアクション」（前掲『岩波茂雄』）であるとともに、次の時代への確かな準備でもあったといえるのではないかな。